

「又叫んでござる、何ぞ貰うて来て遣る」

又どうろ牛蒡の様な尾を振つて走つて行きますと、今度は玉子の厚焼

「サア是れ食へ」

「これなんだす」

「玉子の厚焼ぢや」

「御馳走やな、貴犬おあがり」

「私は毎日食べてる日曜日には洋食やし、今晚あたり、あつさりと奈良漬で茶漬が食べてみたい」

「贅澤なお方やナ」

「コイ〜〜〜」

「又呼んでござる、私の弟が来て居る事が分つて、あつさりと汁の物でもくださるとみへる、待つて

い、貰ふて来る」と飛んで行きましたが、以前に引替へ尾を下げてシオ〜と歸つて来た。

「兄さん行といなはつたか」

「行て来た」

「何ぞ呉れはりましたか」

「何も呉れはれへんね」

「今コイ〜〜と云ふてはつたんは呼んではつたんと違ひますか」

「イムニヤ、行つてみたら、乳母さんで坊様ばんちのシ、やつてはつた」

(終)



創作落語

馬場の狐

樂天坊

世の中の進歩は驚く程駆足で走っております。科學萬能の時代とか申しまして、あのラヂオの電波が一秒間にこの地球をグル〜ツと三遍半も廻りますそうです。そうかと思ふと、獨逸のベルリンでお晝に撮つた寫眞が電

送寫眞にかけますとチツとの間に日本へとんで参りました晩の夕刊にチャンとその寫眞が掲載されると云ふ嘘の様なスピード時代になりました。今に夕方から飛行機で樺太まで納涼に行こうやないかと云ふ時代が参ること

になるやろうと楽しんでますのやが、こんな超々特急の時節に落語家ばかりが明治御維新以前の昔話しを性凝りもせずオネ〜と高座から放送してゐることは、何や知らん化け損やないの狐の様な格好でございます。

その狐や狸かて出ると云ふ様なことは、今日では小學校行きの子供達でさえ「シヨ〜モナイ」と一言に片付け本當にしまへん、そろその筈で狐や狸が本當に化けよるのやつたら、天王寺公園の動物園でも檻の中に隠居さ